

北里コミュニティエリア構想ワークショップ等業務委託報告書

国立大学 東京大学

令和8年3月31日

1. 目的

本業務は「北里コミュニティエリア」の整備を検討するにあたり、ワークショップ等の企画運営および、それに係る運営支援業務等を実施することを目的とする。

2. 業務内容

北里コミュニティエリア整備に向け、地元住民主導による候補地の選定等を行うためワークショップ等を通じて意見交換を行い、地元としてどこにどのようなコミュニティエリアを望むのかについての方向性を導き出す。

また、令和6年度に実施したガリバーマップやワークショップ等の結果を踏まえ、北里コミュニティエリアに係るビジョン及びロードマップを作製する。

（1）ワークショップ等の企画立案

コミュニティエリアの整備に対する一定の方向性を導くため、大学生・大学院生（12名）を対象にし、現地での学生サマーワークショップを開催した。地元の自治会長など、主要なキーパーソンに対するフォーカスグループインタビュー、ならびに地域住民へのヒアリングを通じて、インプット情報を得た。具体的な内容は表1に示してある。

表1 実施したワークショップ・調査

日にち	ワークショップの形態	内容
2025 年 7 月 9 日	インタビュー調査	- まちづくり協議会会長、コミュニティセンターセンター長、連合自治会会長、危機管理課を対象に、北里学区の地域特性、コミュニティセンターの整備に向けた意識、地域住民の防災意識・水害特性などに関するインタビューを実施した。 - ここでのインタビュー調査を踏まえて、北里学区のコミュニティカルテを作成した。
2025 年 8 月 1 日	サマーワークショップ 1 日目	- 桐原学区のコミュニティエリア事業のレクチャー まちづくり協働課 岡田課長、桐原 C C 馬場センター長による、事業の整備および施設運用に関してレクチャーを受け、質疑応答を実施した。その後、施設見学を 20 分ほど実施した。 - ディスカッション 2 グループに分かれ、情報と論点整理を実施した。

2025 年 8 月 2 日	サマーワークショップ 2 日目	- 北里学区まちづくり協議会関係者へのグループインタビュー 各グループが 3 人の関係者に北里学区の地域特性や生活、コミュニティ関係について、インタビューを実施した。 - 十王町の夏祭り参加者へのヒアリング 学生が十王町の夏祭りに参加し、参加している地域住民に地域の生活やコミュニティ関係などについて、10 分程度のヒアリングを実施した。インタビューに応じた人には、謝礼に文房具を手渡しした。
2025 年 8 月 3 日	サマーワークショップ 3 日目	- 北里学区まちづくり協議会関係者へのグループインタビュー 各グループが 3 人の関係者に北里学区の地域特性や生活、コミュニティ関係について、インタビューを実施した。 - ディスカッション 「アクティビティ」「空間デザイン」「運営体制」を軸に、学生を 3 つのグループに分け、北里学区のまちづくりのコンセプトを議論した。
2025 年 8 月 4 日	サマーワークショップ 4 日目	ディスカッション 「アクティビティ」「空間デザイン」「運営体制」を軸に、学生を 3 つのグループに分け、北里学区のまちづくりのコンセプトを議論した。
2025 年 8 月 5 日	サマーワークショップ 5 日目	- 地元フィードバック 3 つのグループがまちづくりのコンセプトをまとめ、地元の関係者に内容を報告した。その場で学生と地元の関係者の間で、簡単にディスカッションを実施した。 - 地元関係者によるふり返し 学生からの報告を聞いて、地元関係者が何を得たのかをふり返し、意見を交換した。さらなる詰めは、地元で進めていくべきであることを確認した。

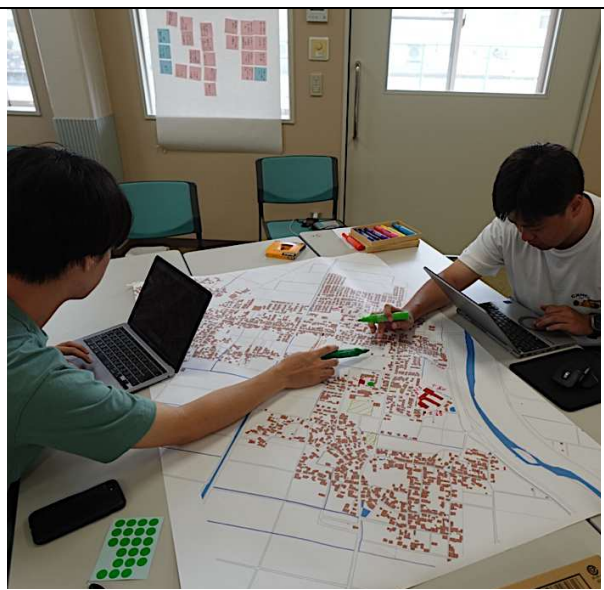


写真1 学生サマーワークショップの様子

（２）地元住民への周知・報告

コミュニティエリア事業の検討作業の周知および地域住民の関心を掘り起こすため、北里学区ふれあい祭りでアートワークショップを実施した。アートワークショップでは、屋内外の居場所をイメージした白図を複数の種類、用意し、自由に色を塗ったり、添景（人の動きや家具、植樹など）のシールを貼ったりして、参加者 41 名に過ごしたい場所のイメージを制作してもらった。年齢層は、3 歳から 60 代まで多様であった。制作を通じて、地域住民とのコミュニケーションを図り、事業の周知に努めた。

制作した作品の特徴として、屋外空間や半屋外空間（ロτζヂア）を題材にしたものが選ばれる傾向があった（図 1）。要素としても、花や樹木、芝生などの自然的要素に加え、ベンチやカフェ、ピクニック、読書などのくつろぎのある空間を求めていることが読み取れた。また、家族で過ごしたり、子どもの居場所で使えたりする空間をイメージしている人が比較的多く見られた。他方で、にぎわいを求める人も一定数存在し、買い物やスポーツ、音楽などのアクティブな活動が身近にできる地域であって欲しいと思われていることを示している。着彩では、全体的に落ち着いた明るい色が好んで使われていた。

参加者の中には、昨年のガリバーマップにも参加した人がいた。継続的に、参加型の周知活動を行うことで、まちづくりの機運醸成や認知向上に寄与すると思われるため、今後もこのようなワークショップを開催することが望まれる。

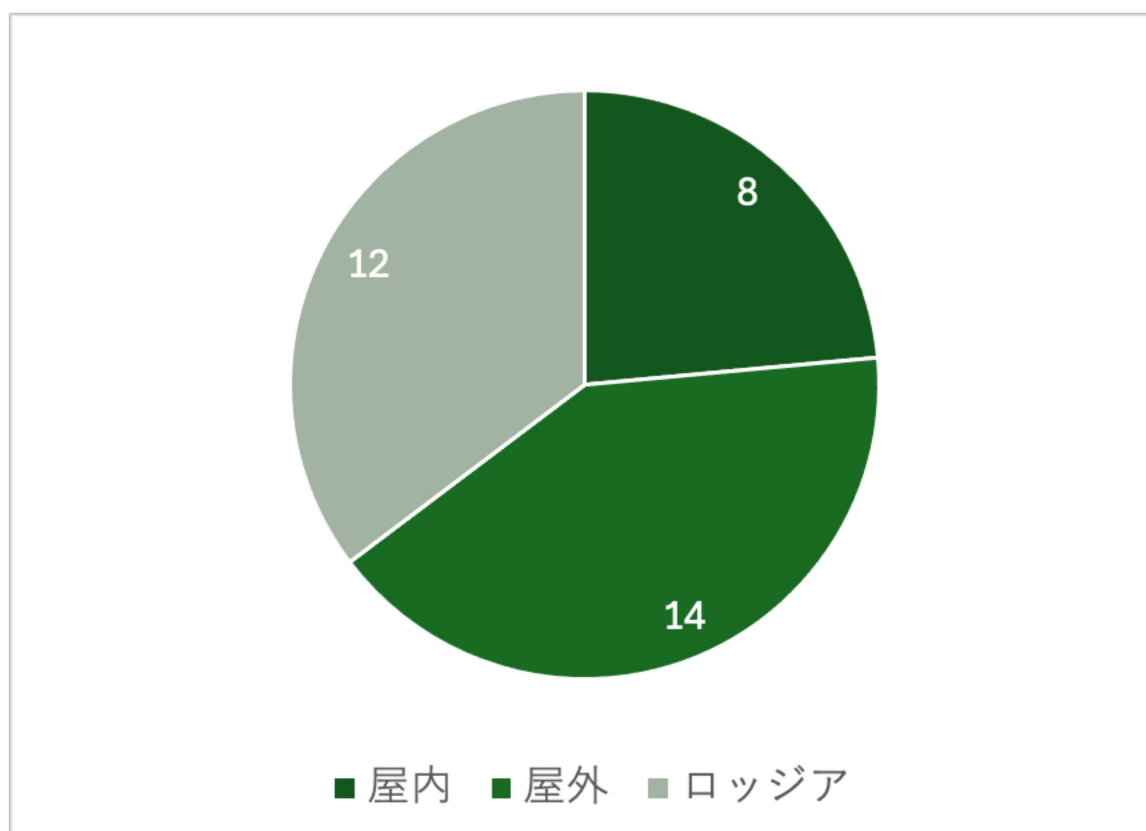


図 1 主に表現されていた場所

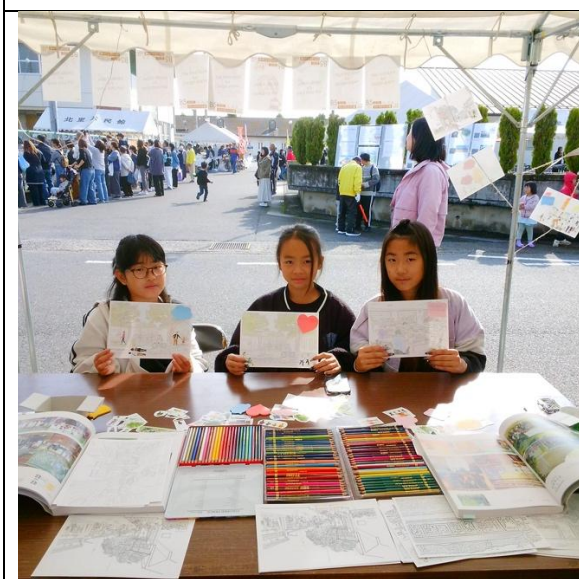


写真2 アートワークショップの様子

（３）北里コミュニティエリア構想に係るビジョン及びロードマップの作製

北里学区のまちづくりのコンセプトには、大きく２つのことを考える必要がある。

まず、「**想い・思い**」である。住民は地域の環境、地域にあるもの、地域に暮らす人々に対してさまざまな想いを抱えている。そうした想いは、普段は潜んでおり、なかなか見えづらいが、地域の暮らしを良くする上で欠かせないものである。そこで、想いに注目することは、地域の暮らしを豊かにする足がかりとなる（資料５参照）。

想いには、いくつかのアプローチの仕方が考えられる。想いを「見える化」することで、想いが認識しやすくなり、コミュニケーションの糸口となる。想いを「つかむ・キャッチする」ことで、能動的に想いを把握し、活用することにつながる。想いを「ひらく・聞く」ことで、心理的な安心感を生み出し、人から人へ伝承しやすくなる。想いを「形にする」ことで、思いは叶い、力量を発揮でき、自己実現につながる。このように、コミュニティのための「ハード」を造るよりも、「ハート」を作ることを重視した取り組みが欠かせない。若い世代からの「時代に合っていない」というような意見などにも真摯に応じるべきである。

他方で、「**魅力**」も大事である。魅力が欠ければ、人もモノも集まってこない。いくら想いを重視しても、人やモノが集まらなければ、そのポテンシャルを活かせない。魅力を創出するには、立地・活動・人・しつらえ・自由を保障することが肝心である。立地とは、人やモノの動きを考慮し、人々が認識しやすく、安全に感じて、アクセスしやすい場所のことである。魅力ある活動は、人々にやってみたい・参加してみたいという動機を生ませ、継続的な交流を誘うのに役立つ。人の存在は、落ち着きや安らぎ、賑わいの創出に寄与する。また、活動を通じてコミュニケーションが活発になれば、仲間づくりにもつながる。しつらえは、機能や利便性だけでなく、人々の視覚や心理にも働きかける。室内だけでなく、屋外空間のしつらえを工夫することで、人々は歓迎されているように感じ、その場所に誘われる。最後に、自由は創造性や活気、やる気を引き出す。やることについて、裁量が許されていると、発想や活力が活性化され、新たな魅力づくりにもつながる。

こうした２つの軸を踏まえると、地区別で異なる取り組みを展開し、つないでいく必要があると考えられる。地区ごとで置かれている状況や環境が異なるため、同じような形で暮らしを豊かにするのは、あまり効果的でないと思われるためである。図２に地区別の取り組みを提案している。コミュニティセンターや小学校、朝鮮人街道などが集積しているエリアは、北里のコミュニティの魅力の核となるポテンシャルを備えている。新しい住民も多く、今後のまちづくりを進めていく推進力にもなりうる。このエリアでは、落ち着いて明るいコミュニティセンターの整備を進めながら、屋外公共空間の魅力を高めることを模索することが望ましい。例えば、美しい自然を感じるようにしたり、道を歩きやすくしたりする。朝鮮人街道も、地元の住民が協力しあって、くつろげる場所を作っていくのが良い。さらに、学区住民が個人ベースで気軽に集って楽しめる文化的活動や経済的活動、学び合いなどの機会を立ち上げたり、参加し

たりできるように、コミュニティセンターや小学校などの環境を整えるのが良い。学生サマーワークショップのインタビュー調査に協力してくれた人の中には、コミュニティセンターを一般の住民が使っていると認識していない人もいた（資料4）。

中核的なエリアの周りでも、多様な居場所が点在するのが良い。そうした居場所では、個人や小さな仲間が特定の趣味や関心を通して交流する。学生サマーワークショップのインタビュー調査でも、地域内に居場所を持っている人の方が少数派であり、居場所ニーズが現れている（資料4）。

野村町や佐波江町の地区では、グランドゴルフ場や直売所、琵琶湖、カフェなど、学区外の人でも訪れるような場所が存在する。そうした場所を中心に、魅力として掘り起こし、「地域のたから」として育てる方法を考えるのが良い。他方で、過去に水害を経験した地区であり、住民の間でも水害の不安が比較的に強く残っている。住民だけでなく、地区外の人とも共同して、リスクを点検したり、地区防災計画を検討したりして、これからの暮らしの作り方を即知的に考えるのが良い。



図2 まちづくりの地区別展開

こうしたまちづくりを進めるためには、施設整備だけでなく、地域を運営する体制の見直しや、継続的なアウトリーチ活動（地域住民への周知や住民参加型のワークショップなど）の実施が欠かせない。そのため、今後の進め方としては、図3のように段階的に進めていくことを提案する。まずは、引き続き、まちづくりを考える場づくりを地域内で展開し、機運醸成を図っていくことが望まれる。これまで実施してきている、文化祭のワークショップや大学との連携調査を継続しつつ、地域に関わる部会やワーキンググループの設置や再編、行政との意見交換の場を、状況を見ながら、展開していく。続いて、機運醸成を踏まえて、北里学区の魅力づくり活動を、小規模でも始めて、少しずつ暮らしの変化を作り出していく。例えば、地区別の環境点検活動や、社会実験、仲間づくりの支援、地区防災計画づくりなど、関心や価値観をもとに進めていく。こうした土台のもとで、コミュニティエリア事業の整備を推進することで、コミュニティの核づくりに寄与する。その際には、地域住民による事業計画のレビューや事業者との協議、運営体制の検討を進めることが重要となる。こうした段階を経た進め方をしている暁には、コミュニティエリア事業の成果として、一層の活動の応援が期待でき、さらに地域運営に関わる人材が育成され、地域全体でのコミュニティ意識の醸成につながっていくことが見込まれる。

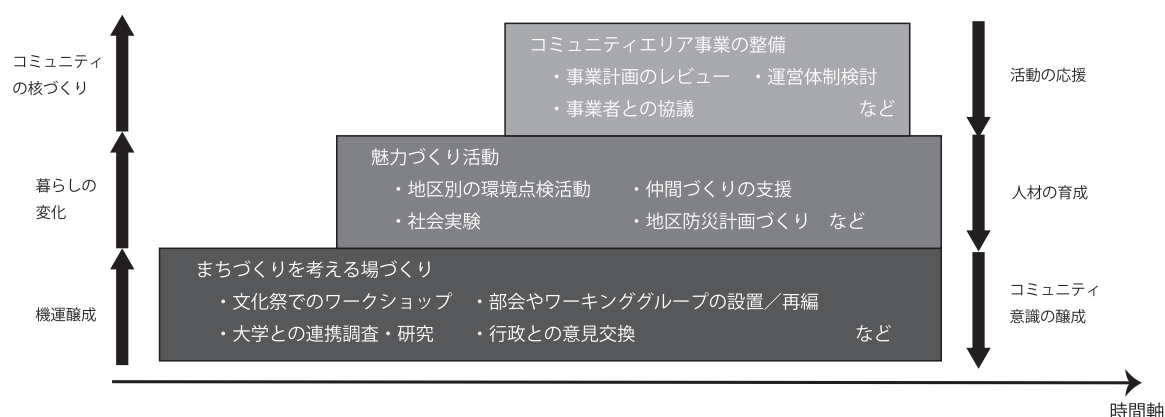


図3 今後の進め方の案